



## 多様性を求めて

浅野 純次

(経済倶楽部理事)

▼「白か黒か」が好きな民族性というのにはあるのでしょうか。欧米だと硬貨の表裏で勝負を決めるところを、日本の賭博はさいころの丁半(ちなみに丁は偶数、半は奇数のことです)。本の落丁、乱丁というの裏表2ページの倍数(大抵は16ページ)が抜け落ちたり前後したりしたものです。それはともかく、「イエスカノ一か、はつきりしろ」というのは男らしくて格好いいし、組織でも右か左か結論がはつきりしない意見や文書は馬鹿にされます。原発反対、TPP推進、尖閣断固死守などと断定的に言うのは気分がいいいものです。

▼確かに結論が求められているときに条件をえんえんと並べてはつきりしないのは困ります。特に政治や経営にはやるのかやらないのか、決断が求められます。とはいえ「イエス、バット」「ノー、バット」ということは常にあるであつてよいのではないのでしょうか。

▼総選挙でいつも不満なのは小選挙区制で、この制度は択一で白黒をつける最たるものです。一人を選ばざるをえないアメリカや韓国の大統領選挙、日本でも首長選挙は白黒をつけるわけですが、これは「この性質上、やむをえない」ところでしょう。ここでは当選者についての多様性は求めようありませんが、多様な意見をもつ(はずの)議会がそれを補います。

▼その何百人もの国会議員を選ぶのに選挙区の当選者がなぜ一人でなければならぬのか。中選挙区制なら政策的、人間的に優れ政党の公認を得られなかった人少数政党や無所属の候補も下位当選の可能性がありま。石橋湛山さんも静岡二区(四人区)の三位か四位

での滑り込みが多く、小選挙区だったら当選はおぼつかなかったはず。政治の劣化が目立つようになったことは小選挙区制によって政治家の多様性が失われたことと無関係ではないでしょう。比例代表制併用では問題の解決にはなっていないと思います。

▼そもそも二大政党制は日本に適した政治制度なのか。米英の政治制度が理想だといってマネしようとした発想が間違っていたのではないのか。小選挙区制導入に反対を言っても、あのときは「政治改革に反対する守旧派」というレッテル張りがメディアを含めて横行し、多勢に無勢でした。どうしても二大政党制なら党議拘束をやめ議員の「個」を前面に出すべきです。

▼ピアニストのブレンデルが若い音楽家たちに向かって「音楽にとって最も重要なものの一つが多様性だ」と言っていました。ピアニストは音楽の解釈、感性、演奏技法についても多様性を追求しなければならぬというのです。確かに自動ピアノのシヨパンしか聞け

ないとしたらこんな悲しいことはないでしょう。絵画だって文学だってサッカーだって多様だから面白い。そのことを私たちはつい忘れがちです。

▼民族や思想や文化も多様性の中から発展が可能になることを忘れて、違いを否定的にとらえてしまう。戦争やテロ、圧迫や対立など世界が直面している深刻なテーマの多くは、違いを脅威と考えるところから生まれているのではないのでしょうか。多様性にこそチャンス、活力が存在すると考えていけば、国家も都市も企業も文化もみな発展の可能性が広がるのでは。最近の日本企業の苦境もこのことと無関係とは思えません。

▼そんな思いを込めて『多様性と個の確立』(東方通信社、735円)という新書版の小著を11月に上梓しました。過去4年間に掲載したこの「談話室」読書通信」をまとめ、「石橋湛山の小日本主義」と「雑誌の多様性」をめぐる二つの小論を収録しています。宣伝がましくて恐縮ですが、機会がありましたらご覧ください。